

Katherine Mansfield にとっての時間と Virginia Woolf にとっての時間

柴田 恭子

序

私達は Katherine Mansfield (キャサリン・マンズフィールド) の作品を読んだあと、うっとりとして作品の中にひき込まれていたのに気づく。作品は私達の心の襞の中までやさしくヒタヒタと浸みて来て、私達を酔わせてしまう。快い哀しみに身を委ね、こんな作品を書いた Mansfield をいとおしく思う。まして34才という若さで、7年近くも病気に苦しみながら他界したとあってはなおさらの事である。彼女の陶器のような繊細さを、そして水晶のような透明さを私達は十分に彼女の遺した作品から読みとることが出来る。しかし、彼女が文学史上どういう貢献をしたか、あるいは貢献とまでいかなくとも具体的にどんな作家達に多少とも影響を及ぼしたかは、それほどはっきりしていない。そこで私はこの点を調べ、さらに Mansfield の及ぼした影響がどう発展したかを、伝記、手紙、日記等、また作品そのものを通して追ってみたいと思う。

I] Katherine Mansfield が遺したもの

Mansfield と同時代の作家に Virginia Woolf (バージニア・ウルフ) がいる。Woolf の時間や意識の流れの扱いは、不思議にも Mansfield と時期を同じくして生み出されたもののようであり、その共通性が著しくあることに私は気づき、二人の交友関係を調べた。

“We have got the same job, Virginia, and it is really very curious and thrilling that we should both, quite apart from each other, be after so very nearly the same thing … Yes, your *Flower Bed* is very good. There’s a still, quivering changing light over it all and a sense of those couples dissolving in the bright air which fascinate me”

(「バージニア、私達が同じ作家という仕事を持ち、しかもこんなに離れて生活しているのに、殆んど同じ目的に向かって進んでいるなんて、本当に不思議でワクワクしますね。ええ、あなたの「フラワー・ベッド」は上出来よ、移りかわる静かな震えるような光が作品全体に降りかかり、明かるい光の中で、幾組ものつれが次第に遠ざかっていく様子を魅かれました」)⁽¹⁾

上の文は1917年8月21日に Katherine が Virginia に宛てて書いたものである。どうやら

Virginia は Katherine に何か作品を、そう Murry²⁾の言葉によればまぎれもなく *Kew Gardens* (「キュー植物園」)の草稿を見せたのである。しかも1919年、実験的作品として世に発表した *Kew Gardens* の内容が、実は1917年8月15日、共通の友 Lady Ottoline³⁾に Katherine が書いた手紙の内容を発展させたものと言えないのである。また同じ8月15日に、Katherine は Virginia にも殆んど同じ内容の手紙を書いたらしいのだが、あれほど手紙を几帳面に保存する癖のある Virginia がその手紙を紛失しており、しかも Lady Ottoline には、Katherine が同じ内容の手紙を2通書いたとはつゆしらないまま、次のような手紙を書いている。

Katherine Mansfield describes⁴⁾, your garden,⁽⁴⁾ the rose leaves dying in the sun, the pool and long conversation between people wandering up and down in the moon light. It calls out her romantic side;

(キャサリン・マンズフィールドはお宅の庭のこと書いて来たわよ。お陽さまの光の中でバラの葉はすっかり生気をなくし、月の光を浴びてそぞろ歩きする人たちの間でかわされる会話のとめどないこと……。どうやらあの人のロマンティックな面を呼びさましたみたいだわね。……)

Katherine は8月15日手紙を書いたあと、18日日曜日夜遅く Virginia を訪ねている。そして3日後の21日に *Flower Bed* の感想をその夜話しあったことと一緒に書いているのである。多分、Katherine はイギリスの伝統的小説形式から脱け出せない Virginia の手助けを積極的にしたのだろう。

当時イギリスの詩壇、文壇とも新しい手法、形式を生み出す寸前にあった。従来のように立派な語り手がいて、読者と作者が述べようとする真実の間をとりもつのではなく、語り手を除き—getting rid of the narrator—従来とは違った物語、いや従来とは違った真実—a different kind of truth—を書こうとしていた。Ezra Pound や T.S. Eliotは Robert Browning の劇中独白からヒントを得、Eliot は *Prufrock and Other Observations* (「プルーフロックとその他の観察」)を書いた。1917年6月のことだった。非常に刺激的な問題を多く含んでいたため Murry, Katherine, Clive Bell⁵⁾ 他で討論した。しかもその詩を読んだのは Katherine その人だったのだ。だが Katherine は日記の中で言っている⁽⁶⁾。“Is that all? Can that be all? This is not what I meant” (「これだけ? たったこれだけ? 私が期待したものとは全然違うわ」) Virginia には、「あれは、つまるところ短篇小説ね」と書き送っている。

そう Katherine にとっては *Prufrock and Other Observations* はすこしの刺激にもならなかったのだ。Katherine は1911年6月22日の George 五世の戴冠式を皮肉った作品を書くために Orage⁽⁷⁾ から渡された Theocritus⁽⁸⁾ の本から、語り手などいらぬ mime form⁽⁹⁾ を素早く身

につけてしまっていたのだ。また1908年、ロンドンに出て来るとすぐに書いた *The Tiredness of Rosabel* (「疲れたロザベル」) にもすでに mime form のきざしはあった。

婦人帽子店で一日働いた Rosabel は疲れていた。漸くアパート近くまでたどりついた場面である。

(She was more than glad to reach Richmond Road, but from the corner of the street until she came to No. 26 she thought of these four flights of stairs.) Oh, why four flights! It was really criminal to expect people to live so high up. Every house ought to have a lift, something simple and inexpensive, or else an electric staircase like the one at Earl's Court—but four flights!⁽¹⁰⁾

(リッチモンド通りにたどりつき、彼女はひどく嬉しかった。しかし、その通りの角から26番地までくる間に、四つもあるアパートの階段のことを考えていた。) どうして階段が四つもあるのかしら! 人をこんな高い所に住まわせるなんて犯罪にも等しいわよ! どこの家にも当然簡単なお金のかからないエレベーターがあるべきなのよ。それともアールズ・コートにあるようなエスカレーターでもいい。ああ四つも階段をのぼるなんて!

他の部分も語り手なしでいきなり Rosabel の心の中に入るという手段をとっている。心の中の言葉が地の文となり、現実が括弧の中に入っているのである。この作品の手法と新しく身につけた mime form が、将来の interior monologue (内面独白), represented speech (描出話法) に発展していくのである。

1915年秋には *The Wind Blows* (「風が吹く」) を発表した。語り手のようなものがわずかにその影を見せているが、殆んど主人公 Matilda の目を通した描写である。

(“Sit down”, he says, “Sit over there in the sofa corner, little lady.”)

How funny he is. He doesn't exactly laugh at you... but there is just something... Oh, how peaceful it is here. She likes this room. It smells of artserge and stale smoke and chrysanthemums...⁽¹¹⁾

(「おかけなさい」彼は言う。「むこうのソファにおかけなさい。お嬢さん」) 何て奇妙な人だろう。人を小馬鹿にして笑っているわけじゃないだろうけど...でも何だかちょっと...まあ、何てここは静かなんでしょう。私はこの部屋が好きだわ。サージの布の匂いやかすかな煙草のけむりのにおい。それから菊の花のにおい...

1917年5月には三篇、全く実験的なものを発表した。*Two Tuppenny Ones Please* (「2ペ

ニ一切符を2枚』)と *The Black Cap* (「黒い帽子」)と *Late at Night* (「深夜に」)である。はじめの二篇は mime form を充分にとり入れた作品で、劇の科白とは違い、言葉と内面独白の両方から成り、場所の指定がわずかにある風刺劇である。そして Theocritus の滑稽さの模倣—amusing pastiche of the volume of Theocritus—が感じられる。

Conductor. Fares, please, Parse you fares along.

Lady. How much is it? Tuppence, isn't it? Two tuppenny ones, please. Don't bother—I've got some coppers, somewhere or other.

Friend. …!

Lady. No, it's all right. I've get some—if only I can find them.

Conductor. Parse you fares, please.

Friend. …!

Lady. Really! So I did. I remember now. Yes, I paid coming. Very well. I'll let you, just this one. War time. My dear.

Conductor. 'Ow far do you want ter go?

Lady. To the Boltons.

Conductor. Another, 'a' penny each.

Lady. No-oh, no! I only paid tuppence coming. Are you quite sure?

Conductor. (savagely) Read it on the board for yourself.¹²⁾ …

車掌：料金をお願いします。料金をお願いします。

女：いくらですか。2ペンスでしたね。2ペニーの2枚下さい。御心配なく—こまかいの持ちあわせていますから。どこかにあるはずですよ。

友達：……!

女：いいえ、かまいません。持っておりますから。どこへ入れたかちょっと……。

車掌：料金お払い下さい。

友達：……!

女：そうですか。私もそうでした。やっと思い出しました。そう、来る時に払ったのでしたね。それではお願いします。今度だけです。戦争なんですよ。

車掌：どちらまでいらっしゃるのですか。

女：ボルトンまで。

車掌：そう。1ペニーずついただきます。

女：そんな、そんなことはありません。来る時は2ペンスでしたよ。間違いないのですか。

車掌：(腹立たしげに) 御自分で料金表をごらん下さい。

女は旅仕度をして夫と食事をしている。恋人と駆け落ちする寸前だ。夫には遠い歯医者へ行くのだと言ってある。夫は疑っていない。夫と家に悲しげな視線を送って家を出る。以上の部分はすべて対話形式、駅へむかう際は内面独白、つづいて駅でなかなか来ない恋人を待っている場面。

He really will be late if he doesn't come now. The guard has begun to shut the doors. Whatever can have happened. Something dreadful. Perhaps at the last moment he has shot himself ... I could not bear the thought of ruining your life ... But you are not ruining my life. Oh, where are you? I shall have to get into the carriage ... Who is this? That's not him.! It can't be!—Yes, it is. What on earth he had get on his head? A black cap! But how awful? He's utterly changed. What can he be wearing a black cap for? I wouldn't have known him. How absurd he looks coming towards me, smiling in that appalling cap!⁽¹³⁾

今こないならもう間にあわないだろう。車掌がドアを閉めはじめた。一体どうしたのだろう。何か怖いことが起きたのだ。ひょっとして、いよいよという時になって自殺したんじゃないかしら。貴女を破滅させる思いに耐えられません……でも私の一生の破滅なんかじゃないわ。ああ今どこにいらっしやるの。もう中に入らなくてはならない。おや、あれは誰かしら。あの人じゃないわ。そんなはずない——まあ、あの人だわ。頭にかぶっているの一体何でしょう。黒い縁なし帽だわ。何てひどい、すっかり人がかわってしまった、どうして黒い縁なし帽なんかかぶっているのかしら。あの人だとはとても思えない。あんなぞっとする帽子かぶって、微笑みながら、何ておかしい格好でやって来るのでしょうか。

そして *Late at Night* は Virginia という女主人公ひとりの内面独白のみの作品である。せっかく編んであげた靴下が Virginia の思う人に、はいてもらえないばかりか、友人にあげてしまったという手紙を受けとり、反省したり、怒ったり、悲しんだり、自己分析したり、最後には手紙を火に投げこもう、そして泣きながら寝ようと思う。あ、だめだわ。火が消えかかっている燃せないわ。それにしても本当にあの人、わざとこんなにすげなくしたのかしら、多分そんなことはない……とやさしい気持ちになり、ねむりにつく。

Katherine は5月にこの三篇を発表し、Virginia は7月に *The Mark on the Wall* (「何やら壁に」) を夫の Leonard Woolf⁽¹⁴⁾ と共に Hogarth Press⁽¹⁵⁾ から出版しているのだ。Katherine はこの頃は若く自信満々であった。初めて Virginia と会った時⁽¹⁶⁾ も、まだ一冊しか出版していないが、その育ちゆえ、現在の環境ゆえ文壇の女王に君臨していた Virginia Woolf に会いたか

ただけなのかもしれない。事実 Virginia は Katherine の作品を ‘the only writing I have ever been jealous of’ (私が嫉妬を感じた唯一の作品) と言っているのに、Katherine が羨んだことは Virginia の持っていたもの、つまり素晴らしい家と彼女を守ってくれる夫だけだったのである。

1915年に出版された長篇 *The Voyage Out* (「船出」) は仲間の間では好評だったが、L. Strachey⁽¹⁷⁾ は「イギリスの伝統的手法を使ってはいるが主題的理念の一貫性の欠如」を難点としてあげている⁽¹⁸⁾。Katherine はガーンソントンでのパーティで Strachey に Woolf に是非あわせてほしいと頼む。Strachey が Woolf に手紙でその旨を伝えた際 *The Voyage Out* を Katherine がほめたこと、顔を ‘ugly face’⁽¹⁹⁾ と紹介したことが注目される。Virginia は「3年間も私のあとを犬みたいにつけまわしていたが、私は彼女に会いたいとも、また彼女の作品を読みたいとも思ったことはない。」といいながらも、1917年2月1日に会うのである。

植民地ニュージーランドの銀行家の娘とはいえ、何の文学的縁故もない Katherine Mansfield と、高名な文芸評論家で哲学者の父を持ち、有名な作家たち—Browning, John Ruskin, Henry James—が足しげく訪ねて来た家に育った Virginia Woolf とでは競争になりそうもなかった。その上 Katherine の夫の J.M. Murry は新進の文芸評論家。妻よりも、しかも正式な妻でない Katherine よりも仕事に重きをおいていた。一方 Virginia の夫 Leonard Woolf は神経を病んだ妻⁽²⁰⁾をあたたく保護しつつけていた。

Virginia のそして Bloomsbury Group⁽²¹⁾ の人たちの Katherine 評は酷いものだった。

‘civet cat that has taken to street walking’ (街をうろつく麝香猫)、Katherine の cheap scent (安っぽい香水の匂い) と cheap sentimentality (安っぽい感傷) が大嫌い、といったのは Virginia であった。体格は頑丈そうだが安っぽく、売春婦のような服を着ている、また若いころの Katherine の数多くの恋愛遍歴をもとに ‘a bitch’ (めす犬) のように行動する、と Bloomsbury の連中は面白がった。幼い時、身内のものに汚されかけた経験を持つ Virginia は夫婦生活ですら結婚後、数週間で拒否して来たので、驚きと憎悪の念をかくせなかった。が次第に Katherine の内から輝き出してくる知性と何か謎めいたものに気づき Virginia の方から Katherine に近づいていった。しかし心の中では Virginia は、自分と同じ階級の人しか賞讃に値しない、自分と同じような背景を持たないものが、知的で多感で自分より素晴らしい作家であるのが許せないという気持を持ちつつけていた。

一方 Katherine は敵と思う相手から固く身を守る術を心得ていた。Bloomsbury Group のあざけりや俗物根性を敵視し、自分はいつもそのグループから締め出されていると感じていた。1919年、とうとう *Lady Ottoline* に手紙を書く。

I confess that at heart I hate them because I feel they are enemies of Art—of real true Art. The snigger is a very awful thing when one is young and the sneer can

nearly kill ….

実は私は心の中では、あの人たちは芸術の敵、真の芸術の敵だと思うので憎んでいるのです。忍び笑いは若い者にとっては非常に怖いもので、あざ笑われたりすれば死んでしまいたいような気持になりますもの。

1917年初夏までに二人の交際はかなり親しいものとなった。姉に次のような手紙を Virginia は書いている。「17才からあらゆる下品なことをやって来たようだが、物を書く態度は誰よりもいいものを持っている。」

Katherine は Virginia の繊細さと、誰からも聞かされなかったが Virginia の幼時の不幸を感じとり、わけのわからない、震えるようなきらめく資質に魅かれたと言っている。

さて、7月に出版された *The Mark on the Wall* は次のような内容である。

私が壁に何かについているのを見つけたのは今年の1月だった。という書き出しで、自分の現状、あたりの情景を述べ、今、目の前にある何かをあれこれ推理しつつ、人生にはわからない事が多い、人間は無知なものだと思ふ。今、立って壁についているものを知ってしまうことを拒否し、考えに沈みこむ、無数に降る考えの雨。だが誰かがそばに来て立つ。壁についていたのはかたつむりだった。

The Mark on the Wall は *Late at Night* に *Kew Gardens* は手紙の内容に触発されたものなのだろう。それと Katherine の手助けと。 *Kew Gardens* の冒頭の花壇の場面と、一番目の中年の夫婦の会話。ゆっくりとはうかたつむりたちとそれに似たような人間たち。みんな緑色がかかった青に溶け込んでいく。どこをとっても次の *Lady Ottoline* にあてた手紙の内容とそっくりである。

Young glimpse of the garden—all flying green and gold made me wander again *who* is going to write about that flower garden. It might be so wonderful, do you see *how* I mean? There would be people walking in the garden—several *pairs* of people—their conversation their slow pacing—their glances as they pass one another—the pauses as the flowers “came in” as it were—as a bright dazzle, an exquisite haunting scent, a shape so formal and fine, so much a ‘flower of the mind’ that he who looks at it really is tempted for one bewildering moment to stop & touch and make *sure*. The pairs of people must be very different and there must be a light touch of enchantment—some of them seeming so extraordinary ‘odd’ and separate from the flowers, but other quite related and at ease. A kind of, musically speaking, conversation set to flowers. Do you like the idea? … Its full of possibilities. I must have

a fling at it as soon as I have time.

who とは一体誰で, Katherine の心づもりは何だったのか, もうすっかりわかった……。

Virginia は1920年7月 *An Unwritten Novel* (「書かれざる小説」) を書いているが, この時はすでに, 伝統的小説を書く者への非難と, 自分自身それから脱皮しようとする姿勢がはっきりうかがえる。そして, さらに大飛躍をして *The Jacob's Room* (「ジェイコブの部屋」) の執筆をはじめなのだ。Virginia は, 何かをほんの1, 2年で Mansfield の中からみつけ出し, 自分のものとし, 大きく羽ばたいた。1923年の Virginia の日記には, 「Katherine Mansfield はほかの誰も与えてくれることが出来ないものを私に与えてくれた」と書いている。Katherine が Virginia に与えたものはどう発展し, また Katherine 自身はどう発展していくのであろうか。

II) Katherine Mansfield にとっての時間

Katherine が Virginia に遺したもの, 与えたものは, 勿論 mime form から発展した interior monologue であり represented speech にほかならないが, 同時に時間を作品の中で扱う意義も二人の共通の目的テーマであったと思う⁽²²⁾。Virginia も一日常性の名のもとに日陰におしやられて来た時間は, 意外にも生と死の統一原理であって「真のリアリティー」を伝達するためには主題は時間以外にあり得ない。一と言っているほどである。

二人の共通の目的は時間で, また時間を扱う手法も共有したにしろ, 受けとめ方がどこか違うのである。どこが違うのか, 何故違うのかをこの章で追ってみたうと思う。

J.M. Murry は言う。「Katherine には自然性という独特の資質がある。つまり作品と生活が密着しており, その上彼女の作品はさまざまな生活経験からくる精神の葛藤を浄化した結果生まれたものであるから, どうしても伝記的事実に作品を照応させて, そこから彼女の精神生活に『愛と幻滅の葛藤』という基本の型を見つけ出すべきである。つまり彼女は美を発見して愛する。それから美につきまとうかに見える醜を発見して嫌悪する。つぎにそれに無関心になり, ついに醜をも含む新たな美を発見して愛する。この葛藤の型が Katherine の中で常に繰り返されているのだ。」

Katherine Mansfield は1908年7月にニュージーランドを後にして以来, 二度と故郷の土を踏むことはなかった。19才10ヶ月の時である。ニュージーランド銀行の頭取の三女として物質的に何一つ不自由なく成長したものの, 心の中は常に不満にくすぶっていた。不器量で気むづかしい生徒というレッテルが小学校時代に貼られたが, 1903年, 姉二人とロンドンのハーレー街にあるクイーンズ・カレッジに留学し, Oscar Wilde や Walter Pater, Edgar A. Poe 等の流行作家の作

品に触れたり、創作活動をするようになってからは不満が消えて、作家になる心が芽生えて来た。1906年、三姉妹はクイーンズ・カレッジを去ったが、Katherine からはどうしても、ニュージーランドにはない文化、そう白人本来の故郷ヨーロッパへの郷愁が去らず、ついに出発したのであった。年百ポンドの父親からの仕送りを受ける約束で…。

そしてほんの半年間に Katherine のしたことと言えば、作家になるために求めた経験—情事—であった。しかしどの男にも求めるものはなく、クイーンズ・カレッジ以来、一生彼女の守護神となった Ida Baker⁽²³⁾ 以外は女友だちもなかった。傷つきながらもなお作家になるためと経験に挑む Katherine に、保護者のような手をさしのべたのは音楽の教師 George Bowden だった。

しかしせっかくの Bowden との結婚も、経験してみただけだったのだろうか。結婚式の当日、破れてしまった⁽²⁴⁾。Katherine が逃げ出したのである。その上夫ではない子供を身籠っていた。結婚の報せと別居の報せの両方を相ついで受けとった母親は、ニュージーランドから駆せつけ、あっという間に娘をドイツのパバリヤにある温泉保養地の修道院に送ってしまう。修道院は何とか逃げ出したものの、子供は流産してしまった。悲しみにくれる Katherine からの申し出で Ida Baker は身寄りのない子供を世話する。20才の子連れの子をドイツの有閑夫人達は好奇の目で見た。彼等の格好の餌食となった。Katherine はドイツ人に対する嫌悪感を、痛烈な皮肉をきかせた作品集にまとめあげた。また、中部ヨーロッパの青年達と知りあい、文学活動をし、Chekhov の作品を知った。勿論 Chekhov はまだ英訳されていなかったのだから、作品群のアウトラインを知る程度だったろうが、Chekhov の時間の扱い、長い時間の流れを寸断し、ほんのすこしの時間を書く手法などは強烈な印象を Katherine に与えたといっていいたいだろう。Chekhov と作品を持ってロンドンに帰ったのは、1910年1月だった。George Bowden のもとに身を寄せ、Bowden から *The New Age* 誌を紹介され、A.R. Orage を知る。はじめてリウマチ熱に苦しみ、はじめて Katherine Mansfield のペンネームを使う⁽²⁵⁾。翌、1911年6月、Theocritus の作品を読み、次第に作品の構成形式を整えていった。*The Festival of the Coloniation* (「冠式のお祭り」と題した全くの mime form の作品を *The New Age* 誌に発表した⁽²⁶⁾)。12月 *In a German Pension* (「ドイツの宿にて」と、ドイツ物を一冊にして出版し、好評だったが、生存中は二度とこの本を出版しなかった。同じく12月に *Rhythm* 誌の編集者 J.M. Murry と会う。オックスフォード大学三年生だった Murry は、文芸評論家の道をとるべきか迷っていたが、Katherine の意見も考慮に入れ、結局翌年4月、大学を辞め Katherine のアパートでの共同生活をはじめた⁽²⁷⁾。そして二人はすぐに正式な結婚が出来ない事を承知で同棲生活に入った。

二人の恋人同志というより、編集者と副編集者の色あいの濃いものであったが、それでも Katherine は、もう経験を求めて飛び出すのではなく、受けとめる姿勢になり、陶器のような繊細さを持っていて、話しかけるものがやさしくしないではいられない女になっていた。10月、*Rhythm* 誌は倒産し、ひどく貧しい生活を強いられるのだが、子供を産めない身体になっている

旨の宣告を受けたのもこの時期であった。経済的援助者が出たのと、家からの仕送りが120ポンドになったのとで急場はしのぎ、1913年3月 *Rhythm* は *The Blue Review* と名前をかえ再登場、D.H. Lawrence との交友がはじまる⁽²⁸⁾。Murry の文芸評論に打ち込む情熱と Katherine の創作に打ちこむ情熱。Murry を思う気持にすきまが出来はじめる。Murry の友人 Francis Carco にパリで会う。Carco は Katherine の感性はより自分に近いと言う。1911年、完全な破産。極貧に落ち二人共病気で倒れる。7月、D.H. Lawrence は正式な結婚をし Lawrence の妻 Freida は前夫から贈られた指輪を Katherine に贈る。8月第一次世界大戦がはじまったが、Murry は体調の悪さから兵役免除になったものの収入がなく、もっぱら Katherine の収入と家からの仕送りをあてにする生活が続く。Katherine は Murry から逃げたいと思う。そんな時、あの Carco から数通のラブレターが届き、翌年2月、ニュージーランドから出て来た弟 Leslie にお金をもらおうと、Carco のもとに走る⁽²⁹⁾。が結果はみじめで、二度と Murry のそばを離れまいと Katherine に決心させただけだった。1915年4月、ニュージーランドを書いてみる⁽³⁰⁾。6月 Murry はフランスの文芸誌の評論の仕事を見つけ、Lawrence と *The Signature* 誌をはじめる。最愛の弟 Leslie が大戦に参戦するためロンドンに来、9月末の数日を一緒に過ごす。弟は Katherine に一生のテーマ、ニュージーランドについて書くこと、生まれ育った国への神聖な義務を果すべきことをくりかえして言い、出征したが、10月7日、フランスの森で演習中に事故死する。‘God forgive me for all I have done. Lift my head, Katy, I can’t breathe’—⁽³¹⁾。

(神よ、私がいたしましたすべての事をお許し下さい。ケティ、頭を持ちあげて/息が出きないの) はあまりに有名な言葉であるが、この言葉が Katherine の作風の殆んどを占めたと言ってよいだろう⁽³²⁾。11月、L. Strachey とはじめて会い、新しい文学仲間との交友がはじまる。1916年はじめて Chekhov の英訳が出版される。父からの仕送り156ポンドにあがる。Murry は Lawrence と文学上の意見の相違から訣別。Katherine, Murry はそれぞれの仕事や仲間との交友が多くなる。Murry は陸軍翻訳官の仕事を手に入れ給料をはじめて手にする。Bertrand Russel が Katherine に思いを寄せるが、Katherine が望んで交際をはじめた相手は Virginia Woolf だった。仲間が何人か参戦し、傷つき、死んでいき、弟の死を含め、死が非常に身近かなものとなる。T.S. Eliot の詩集が出版され、Virginia との交際が深まり沢山の作品を書き、充実はしていたが過労だったため、Murry, Katherine はそろって倒れてしまった。Katherine の病は以後回復せず、結核を病んでしまう。激しい咳の発作も続いておこり、1918年2月とうとう咯血。体はみるみるやせ細ったが、Murry の相変らずの忙しさに別居をやむなくされた。Katherine は Virginia を羨んだ。やさしい夫と大きなどっしりした家。Katherine は6年間に22回の引越しをし、この8月はじめて自分達の家を手にする。Murry の年収560ポンド、父親からの仕送り280ポンド。

弟が死んですぐ後に仕上げた *Prelude* をはじめとする、美しい過ぎ去った時間を書いたニュージーランド物は影をひそめ、絶望のどん底の作品が並んだ⁽³³⁾。「地獄の一日。泣くまいと決心

する。ブランデーを飲む。泣いてしまった⁽³⁴⁾。」

Virginia は Katherine のやつれていく様子に驚きながらも、その病気ゆえに、もうあの頑健さはなかったから、やさしくなっていた。が、お互いの作品の批評には甘いところは全くなかった⁽³⁵⁾。

7月に Hogarth Press での出版に1年近くもかかった *Prelude* がようやく世に出たが、それより1ヶ月遅れて出た *Bliss* (「至福」)の方がはるかに好評を博した。5月に正式な結婚が出来た。この結婚によって何か、多分 Murry の愛がもっと深くなる、そうすれば体も良くなると Katherine は希望を持っていたが、収入がいくらか多くなった Murry が Katherine に叶えてくれたことは、借家住いにピリオドをうったこと、つまり家を持てただけだった。Virginia が Katherine を足しげく訪ね、Katherine の母親の死に際しては、「私も13才で母を亡くしたが、あまりの悲しさに自殺しようかと思ったくらいだ」となぐさめている。Katherine は体の具合のいい時には、これから書こうとしている作品について、詳細に語って聞かせることもしばしばあった。1919年、Murry の収入800ポンド、Katherine 300ポンドの仕送り。Murry の活躍は目ざましく、また Katherine の創作意欲も旺盛だった。いや病気が Katherine を書くようにとせきたて、作家魂が怠けることを許さなかったのだ。が、離ればなれの生活のあまりの長さに、孤独に苦しむ。Dr. Sorapure の指示に従い療養に身を入れはじめたが、1920年 Virginia が訪れた時は、傷ついたけものが、ものうげに身体をひきずって歩くような Katherine に驚いてしまうのである。

「神よ、あなたの^{みひかり}御光が私を買きますよう、私を水晶のように透明にしてください⁽³⁶⁾。」Katherine は祈りながら書いた。あまりさみしいので、Murry に膨大な量の手紙を書いた⁽³⁷⁾。そしてもう、醜をも含む美を書く準備は出来ていた。真実の作品を情熱をもって書きはじめた。

Murry から Katherine の孤独な気持を聞かされた Virginia は、胸を痛め手紙を出したが返事はなかった⁽³⁸⁾。1921年、Katherine は忙しかったのだ。At the Bay (「入江のほとり」) *The Doll's House* (「人形の家」) *The Garden Party* (「園遊会」) 等ニュージーランドを書きあげた。1922年2月医者も Dr. Manukin という当代きっての結核に関する名医にかわり⁽³⁹⁾、作品は3、4時間で書かれることもあった。が、*The Fly* (「蠅」) は2月6日から26日までと、20日間もかかって書かれた。弟に、ニュージーランドに負債を払い終ったと実感した。ひたすら治療の生活をその後はじめた。奇蹟が起るように、健康に、太陽の子のように健康になれるよう祈った。*The Canary* (「カナリヤ」) を8月に書き、次の作品の可能性をその中に秘めた。が、死を予期していたのだろうか。10月の日記は哀しいまでに澄んでいる。「秋の庭に落葉。かすかな跼音。やさしいひそひそ話のようだ。木の葉は飛び、回転し、舞い、震える。」

1923年1月9日、年末に Chekhov の劇と一緒にみましようという手紙を受けとった Murry が、フォンテンブロー・アヴォンのホテルにいる Katherine を訪ねた。一日中、Murry は

Katherine のこれまでにないやさしさに目をみはり、美しさに胸を震わせた。そして夜、激しい発作の後、Murry を魅きつけてやまなかった美しい手を朱に染めて、他界した。

1916年1月、弟が死んで3ヶ月後に、「詩でもない、散文でもない、一種独特の散文を書きたい」と述べ、その後「水晶のように透明でありたい」つまり、一つの特異人物から直接に真実を展開すること、媒介の性質が内容の性質にはねかえるような作品を書きたいと願った。そして、1921年、「この作品⁽⁴⁰⁾で特に必要だと感ぜられることは、動詞の時を現在から過去へ、また過去から現在へと巧妙に変換させること、柔かさと軽快さがあること」とかわる。作品を書く際にいつも目標を定めて、その目標に向かって書いていたのだ。

ここに *The Daughters of the Late Colonel*⁽⁴¹⁾（「故大佐の娘達」）という作品がある。1920年12月の作品である。この作品を読みながら、結局、時間は Katherine をどんなふうに訪ずれ、Katherine はどんなふうに受けとめたかを考えてみる。

父である大佐が亡くなって一週間。完全に父の庇護のもとにあった老嬢 Josephine と Constantia はベッドの中で形見分けの相談をしている。父親という過去が二人の現実にあたり前の如くあらわれ、二人をおびやかす。以前は父がいたから、未来について自分たちで決めることはなかった。未来をのぞき見る必要すらなかったから、一步もすすめない二人。父の看護婦にひまを出す件もそうだった。一週間もしたい放題され、まだいい出せないのである。話は一週間前へ、臨終の父へとさかのぼる。父の紫色の、片目だけ開いたおこった顔！ この思い出の場面は姉妹のいずれかの内面独白の形をとっている。そして牧師の来訪。葬式の打ち合わせをしている間、姉妹はそれぞれ自分の意識の流れにわずかながら身を委す。過去となった父が、現在に立ち戻る恐怖を、立ち戻って二人が父の許可なく父の体を埋めてしまったことを父が怒るのではないかという恐怖におののく。父の持ちものを調べに父の部屋に入った時をさえそうだ。うす暗い父の部屋の中で白く浮かび上っている父の寝ていたベッド……そう、もしかすると、父はあの簞笥の中にもいられないと同時に思う二人。が、今決心した Constantia は父を、簞笥の中にもいられない父を鍵をかけてとじ込めてしまった！ そして遠く、多分印度にいる弟の Benny に父の形見の金時計を送ろうと思う。いや、やはりあれは Benny の子 Cyril にあげよう。ずっと止ったままだけど、これに関しては Cyril の方が縁があるんだもの、と思う。そして一瞬時間は未来へと飛び、時計をしている Cyril を想像し、また、過去へ、父が元気でいたころ、Cyril が訪ねて来た時のことへと移る。ケーキとメラングと時計と。二人の伯母は Cyril に「お父さんは今でもメラングが好きか」と聞く。私達の弟はメラングが好きはなはず、あんなに好きだったから、今だって好きはなはず。二人の真剣な眼差しに、Cyril はうそをつく。「ええ、お父さんは、今でもメラングが好きですよ。」二人にとって過去は知っている世界、familiar な世界、安心出来

る世界なのである。そして話は、女中の Kate へうつる。現実と過去の間で立ってうろろうしている二人の老嬢の前に。女王然としてしっかり現実に足をふまえている女中のアリス。が Kate を辞めさせる事は、二人にとって新しい生活のはじまりである。料理一つ作れない二人はもうはじめから未来をのぞき見ることを避けてしまった。知らない世界、未来……。その時、バレオルガンが鳴った。父が生きていた時、6ペンス銀貨を持って走り、どこかへ立ち去ってもらったものであるが、今はもうその必要もない。怒って床をトンと杖でたたき音はもうないのだ。父が死んで一週間、父が死んで一週間、とバレオルガンが叫んをいるみたいだ。ふと、母の写真に目が行く。35年前に死んだ母の写真を見つめ、もし母が生きていたら……と考えているうちに、Josephine の心の中では何かが、チッチッと鳴きはじめる。今忍びよるやさしい光にじかに触れようと窓辺へ行く。一方、金色の仏陀の前にいる Constantia は不思議な憧憬の思いに浸っていた。何もかもすんでしまった。過去のことはトンネルの中で起ったことなのだ。今、月も海も雷雨も感じられる外に出たことを実感する。

今、将来の事を言わないと、永遠にいいそびれる。そう思って口に出そうとした瞬間、Josephine が、「私、考えていたのよ」と言った。そして二人、お互い譲りあっているうちに、またトンネルの中へ、もう鍵をしめてしまったあの過去の中に戻っていくのである。

Katherine Mansfield にとって、過去は、はじめから美しい時間であった。弟の死後、過ぎさった美しい時間を求めて、弟とすごした故郷に対する負債を払うのだと言って、幼年期の思い出を現実的所有物のようにして、ひたすら書いた。*Prelude* は1915年にはじめて手がけたが、これも、身につきはじめた古典の知識から、しらずしらず、古典劇の三単一の原則、時、場所、筋の単一を満たして書いたのだ。過去という実生活をどっしり作品の中に根をおろさせ、その過去を死んだ時間をいとおしみながら書いたのだ。未来は、そう未来とは Katherine にとっても、決定出来ないもの、避けたいものだったのである。絶筆、*The Canary* (「カナリヤ」) では、病気とか、貧乏とか、人の死といったあらゆる過去から人は立ち直ることが出来る。何故なら知っているから、過去はもうこれ以上、人に悪さをしないから、それ以上苦痛を与えないから、知っているものだから安心して立ち直れる。だが未来は、胸のここの所にあるわけのわからないものは、わけのわからない悲しみは何としましょう、皆さんはこの悲しみを持っていらっしゃるのにお気づきになりましたか、と結んでいる。Katherine にとって未来は死以外の何物でもなかった。人は生まれた瞬間から死に向かう、今咲いた花に、いや、今出来たばかりの蕾に死を読みとるのである。幼女 Kezia は祖母 Fairfield 夫人に対してこう質問している。

“Does everybody have to die?” asked Kezia.

“Everybody!”

“Me?” Kezia rounded fearfully incredulous.

“Some day, my darling”.

“But, grandma.” Kezia waved her left leg, and waggled the toes. They felt sandy.

“What if I just won’t?”.

“We are not asked, Kezia”, she said sadly. “It happens to all of us sooner or later.”⁴²⁾

「人はだれでも死ぬの」ケザイヤは聞いた。

「だれでもよ」

「私も死ぬの」ケザイヤは信じられないといった声で言った。

「いつかは、ね」

「でも、おばあちゃん」ケザイヤは左の足の指を動かした。砂でザラザラしていたのだ。

「もし、死にたくないっていったら……」

「神さまはね、こちらの都合などお聞きにならないんだよ。」彼女は悲しそうに言った。

「遅かれ早かれ、みんなそういうふうになるんだよ」

Katherine は1日1日を死の近さと不可避性に苦しんだ。そして時間の侵蝕作用と病人特有の感受性でそれを受けとめた。だから、生と死の割れ目の時間から作品を作ったといっても過言ではない。そして過ぎ去っていく美の記録者の名前をほしいままにしているとも言えるのだ。過去のいろいろのものの中から、選択し、吸収し、過去を自分の下僕とし、自分は美の記録者となる…。そして未来とは、今日一日良い日と思っても、もう翌日は人生という、時間という無情なものがいて、肩をつかまえてゆさぶるもの、相対するもの、おびえてじっと向かいあうものだった。では、現在は何だったのだろうか。Josephine や Constantia と同じく、ただ在るだけ、在って忘れ去られた過去と自分自身がならないようにひたすら書くのみ。命のつづく限り書くのが現在だったのだ。しかし、死を半年後にひかえた Katherine は、敬愛した Chekhov を思いながら次のように言っている。

「彼は、一度唱った歌手が何を犠牲にしてもいい、今一度同じ歌を唱う機会がほしいと感じるあの感情を持ったことと思います。」

もう一度、過去を、いや現在をちがうふうに生きてみたい。そうすれば、私にだって未来はいいおいしいものになったかも……。

<その1完>

注

- 1) Anthony Alpers, *The Life of Katherine Mansfield* (The Viking Press, New York, 1980) p. 251.
- 2) John Middleton Murry (1889-1957)
- 3) Lady Ottoline Morrel: D.H. Lawrence のパトロンで、後に Mansfield の心のよりどころとなった人。
- 4) ガーシントン (Garsinton) にあるオットリン夫妻の家の庭のこと、多くの作家たちが、たびたび集った場所。
- 5) Virginia の姉 Vanessa の夫で、美術評論家。
- 6) 1917年, Chekhov の作品と比較して言い放ったものと思われる。
- 7) Alfred Richard Orage: Katherine の背後にいていつも Katherine の創作活動に協力的だった。*The New Age* 誌の編集者。
- 8) 紀元前三世紀のギリシヤの牧歌詩人。
- 9) 古代ギリシヤの身ぶり狂言、無言道化芝居の台詞つきのものの形態、形式。
- 10) Katherine Mansfield, *Collected Stories* (Constable and Company, London, 1968) p. 525.
- 11) Katherine Mansfield, op. cit., p. 107.
- 12) Katherine Mansfield, op. cit., p. 651.
- 13) Katherine Mansfield, op. cit., p. 657.
- 14) 政治評論家, Virginia とは1912年8月に結婚。
- 15) Woolf 夫妻が、手刷り印刷機を購入し、はじめた印刷所、1919年以降、文学、思想関係の出版で活況を示した。
- 16) Katherine は28歳, Virginia は34歳であった。
- 17) Virginia と結婚すると思われていたが, Virginia は Leonard Woolf を選んだ。
- 18) Woolf はこれに対して、「私は人生の計り知れない混乱の気持を書こうとした」と故意の一貫性の欠如をのべている。
- 19) 醜い能面のような無表情な顔をしていて、髪は茶色、目も茶色で、その目はひどく離れている。
- 20) 1905年以来、精神症疾患になやんだ。何度か小康をとりもどすが、1941年、幻聴や再三再四にわたる神経的発作への恐怖から自殺。
- 21) 大英博物館を含むブルームズ・ベリー地区に、V. Woolf 家があり、ここでさまざまな芸術家の会合が開かれた。教養ある俗物の集まりといったノーチェの批評が適切であろう。
- 22) 冒頭の手紙文参照されたし。
- 23) 一生独身で、Katherine の守護神となり、Katherine を愛しつづけた。Ida と父親が「故大佐の娘たち」のモデルといわれる。
- 24) 1909年3月17日のモーニングポストで二人の結婚が報じられている。
- 25) 本名は Kathleen Mansfield Beauchamp
- 26) 風刺がよく効いた劇の科目の形態のもの。
- 27) *Between Two Worlds* の中では、すぐに恋愛関係に入ったのではなく、まず Katherine の好意を受けて下宿人として生活し、つづいて編集者とその助手という関係、それから、むしろ Katherine に望まれて恋愛関係に入ったと述べている。
- 28) Lawrence は恩師で男爵である人の夫人 (Freida) と恋仲になり、夫と子供達を捨てさせた。
- 29) この経験から、作品「黒い帽子」を書いた。
- 30) *The Aloe* という題だったが、後に *Prelude* と改題。
- 31) C.K. Stead, *Katherine Mansfield, Letters and Journals* (Allen Lane, London, 1977) p. 62.
- 32) 彼はフランスの森の中に横たわり、私はまだ立って歩き、陽の光や海からの風を感じているけれど、彼同様私は死んでいるのだ。現在と未来は何の意味もない。それなら何故自殺しないか、それは私達が共に生きた美しい時に対してなすべき義務があるからだ。私はあの時代のことが書きたい、弟も私

にそれを書かせたかった。〔1915年11月〕

- 33) *Bliss, Je ne parle pas français* (「私, フランス語話せません」) など。
- 34) 実はこの日記は1920年1月8日のものだが, 1919年は孤独の一年間で, 12月には「新しい夫」と題して, 死神の妻となる詩を Murry に送っている。
- 35) Virginia の *Bliss* への酷評と, Katherine の *Night and Day* (「夜と昼」)への酷評は, 質は違うがそれぞれ, 味わい深いものである。
- 36) Lord. make me crystal for thy light to shine thorough.
- 37) 1913年夏から, 1922年12月31日まで 701 頁に及ぶ手紙のみの本となって出版される位の量を書いた。
しかもこれは Murry に対してのみの量である。
- 38) 1922年の形見分けの遺言には, Virginia の名前はなかった。
- 39) 1回の診察料が当時のお金で 300 フランだった。
- 40) *The Weak Heart* (「気弱な心」)
- 41) Katherine Mansfield, op. cit., p. 262.
- 42) Katherine Mansfield, op. cit., p. 226.